

「秘密」の世界

——谷崎潤一郎の〈隠れん坊〉——

中 谷 克 己

一
谷崎潤一郎の「秘密」は明治四十四年十一月、当時の商業総合雑誌『中央公論』の創作欄に、正宗白鳥の「雨の日」と並んで掲載された。文壇史上に名高い、永井荷風の讃辞「谷崎潤一郎氏の作品」が『三田文学』誌上に発表されるのが、やはり同年の十一月のことであり、したがって「秘密」発表時には谷崎の文名はまだ華々しい輝きに包まれていたわけではない。

谷崎は明治四十二年七月、第一高等学校英法科を卒業、同年九月に東京帝国大学国文科に入学する。英法科に在学した谷崎が進学の際して、立身出世の最短距離にある法学部を選択しなかったのは、既に第一高等学校時代から志望していた作家への道の実現に意欲を燃やしていた彼が、⁽¹⁾ 国文科だったから、学校の方を怠けるのには一番都合がいゝと考へたから⁽¹⁾に他ならない。しかし、文学的才能に対する自恃や熱意の強さがそのまま作家的出発を保証するわけではない。とりわけ、谷崎は、⁽²⁾ 当時流行の自然主義文学に反感を持ち、それに反旗を翻さうと

云ふ野心があつたために、尚更進出が困難であるとか思へなかつた⁽²⁾。投稿原稿の黙殺、失望と焦慮による強度の神経衰弱、そして放浪。谷崎は暗澹たる状況に呻吟しながら、にもかかわらず、懸命に『新思潮』（第二次）や『スバル』に作品を書き続けていたのである。谷崎が当時の一流雑誌『中央公論』から執筆依頼を受けたのは、丁度その折のことであつた。

後年、谷崎はこんなふうに語っている。⁽³⁾

「秘密」は「中央公論」の当時の主幹故滝田樗陰氏の依頼に依つて、始めて同誌上へ掲載し、一枚一円と云ふその頃の新進作家としては優遇された原稿料を貰つて、筆の生活の第一歩を踏み出した記念の作品である。

かなりの年月が経過してからの言辞とはいえ、ここには「秘密」によつて長年の夢が叶えられたという率直な喜びと自信のほどがうかがえよう。むしろ、それは単に原稿料を貰つたということだけによるのではない。また、「秘密」が好評をもって迎えられたということでもな

い。原稿料の点からいえば、額の多少はあるにしても、既に戯曲「信西」(『スバル』明44・1)で経験済みであり、評価の点を問題にするなら、先行の「刺青」(『新思潮』明43・11)や「麒麟」(『新思潮』明43・12)の方がはるかに注目を浴びていた。おそらく、谷崎が「秘密」を作家活動の初発に位置づける所以は、原稿料や他者の評価とは無関係に、「秘密」が自己の作家としての在り様や方向性を意味づけた、という思いがあったからではないだろうか。因みに、谷崎の実弟精二は「谷崎潤一郎氏に呈する書」⁽⁴⁾で、「秘密」には「作者の心理経験」が「最も直截に、最も赤裸々に」描かれている、と評しているが、近くにいた肉親の言葉だけに正鵠を射ているように思われる。

では、「秘密」に描かれた谷崎固有の文学姿勢とは如何なるものか。また、それはどのような方向性を孕んでいたのか。以下、章を改め、具体的に考察していきたい。

二

「秘密」は次の一節から始まる。

其の頃の私は或る気紛れな考から、今迄自分の身のまはりを裏んで居た賑やかな雰囲気を遠ざかつて、いろ／＼の關係で交際を続けて居た男や女の圈内から、ひそかに逃れ出ようと思ひ、方々と適当な隠れ家を捜し求めた揚句、浅草の松葉町辺に真言宗の寺のあるのを見付けて、やう／＼其処の庫裡の一と間を借り受けることになつた。

新堀の溝へついて、菊屋橋から門跡の裏手を真つ直ぐ行つたところ、十二階の下の方の、うるさく入り組んだObscureな町の中に其の寺はあつた。ごみ溜めの箱を覆した如く、彼の辺一帯にひろがつて居る貧民窟の片側に、黄橙色の土塀の壁が長く続いて、如何にも落ち着いた、重々しい寂しい感じを与へる構へであつた。

主人公の「私」は日常圏の煩雑な人間関係から逃れて、「浅草の松葉町辺」の恰好な「隠れ家」にひとり身を潜ませる。隠遁の目的は世俗の喧躁に煩わされずに「勉強をする為めではない」。私」は、刻苦勉励といった、明治の自己実現「立身出世の階梯を登ろう」というのではなく、むしろ逆に、おのれの神経が「刃の擦り切れたやすりのやうに、鋭敏な角々がすつかり鈍つて」(傍点、原文。以下同じ)、均質な日常の「懶惰な生活」に堪えられなくなったからに他ならない。冒頭の「気紛れな考」という言葉には、日常の異和を嗅ぎ分けるがゆえに、逆に日常から拒まれて居る「私」の精神的在り様が既に暗示されているが、そうした「私」の心的状況が谷崎の「暗澹たる危惧の時代」⁽⁵⁾の精神構造に照応していることはいうまでもない。

日常の倫理や価値観に疲弊した「私」にとって「隠れ家」とは治療と再生とを保証する、いわば「アジール」としての象徴的意味を持つていたのだ。その点からすれば、「私」の隠遁が「渋谷だの大久保だのと云ふ」山の手「上昇空間」に向かわず、「下町の雑沓する巷と巷の間」に挟まりながら、極めて特殊な場合か、特殊の人でもなければ、たに通行しないやうな「場所」を選択するのは当然のことであろう。しか

し、それにしてもなぜ、そこが浅草の松葉町辺Vでなければならぬのか。決してそれは偶然の選択ではあるまい。たとえば、谷崎は「鮫人」(『中央公論』大9・1〜10)でも、落魄の画家服部の隠れ場所を浅草の本願寺の裏の方にある、松葉町の露地の奥の長屋Vに設定している。明らかに谷崎の深層には、△松葉町Vは特別の界域として固着していたのだ。

△松葉町V——そこは隅田川の観音を縁起とする浅草寺、隔離された愚所吉原、そして遊興空間としての六区に隣接する界域であり、地理的観点から見ても、文化的背景からいっても、昔から聖性と俗性とが混在する典型的なアジール空間であった、と考えられる。江戸的なものへの親和を増殖させていた谷崎が、そうしたことに無頓着であったはずはない。そういえば、「秘密」の中には△松葉町のお寺の近傍は、其のうちでも一番奇妙な町であった。六区と吉原を鼻先に控へてちよいと横丁を一つ曲がつた所に、淋しい、廃れたやうな区域を作つてゐるVと、聖俗混淆の非日常的な雰囲気さがさりげなく付け加えられている。

さて、△隠れ家Vに自閉した△私Vは、異様な仕掛けを駆使しながら日常からの乖離を試みる。

天氣の好い日、きら／＼とした真昼の光線が一杯に障子へあたる時の室内は、眼の醒めるやうな壯觀を呈した。絢爛な色彩の古画の諸仏、羅漢、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、象、獅子、麒麟などが四壁の紙幅の内から、ゆたかな光の中に泳ぎ出す。晝の上

教——種々雑多の傀儡が、香の煙に溶け込んで、朦朧と立ち罩める中に、二畳ばかりの緋毛氈を敷き、どんよりとした蛮人のやうな瞳を据ゑて、寝ころんだ低、私は毎日々々幻覺を胸に描いた。

△私Vは部屋の周囲を△古い仏画Vで飾り、白檀や沈香を焚きしめる。視覚や嗅覚の意図的操作によって、外界から△隠れ家Vを遮断しようというのだ。そして仮構された異空間の中で、魔術・催眠術・探偵小説・解剖学などの△奇怪な説話と挿絵に富んでゐる書物Vを耽読しながら、朦朧とした中に芳烈な夢幻の世界を浮上させるのである。日々繰り返されるこうした演出は、しかしながら、厳密な意味では△私Vに真の至福を保証するものとはなり得ない。秘画や香の装置がどんなに魅惑的な快味をもたらそうとも、自閉するみずからの存在自体が反転しなければ、それは単なる錯覚にすぎないからだ。△私Vの隠遁が一時の享樂を超えて、真の意味での自己再生にまで昇華するには△私Vの存在そのものの変換が不可欠なのである。

△私Vの変換は化粧||女装によって試行される。元来、衣服や反物に対して△丁度恋人の肌の色を眺めるやうな快感の高潮Vを感じる△私Vは、ある古着屋の店先に吊り下げられていた小紋縮緬の袷に心を奪われ、女装を思い立つ。

大柄の女が着たものと見えて、小男の私には寸法も打つてつけてあつた。夜が更けてがらんとした寺中がひっそりした時分、私はひそかに鏡台に向つて化粧を始めた。黄色い生地きじの鼻柱へ先づべ

ツトリと練りお白粉をなすり着けた瞬間の容貌は、少しグロテスクに見えたが、濃い白い粘液を平手で顔中へ万遍なく押し拡げると、思つたよりも、りが好く、甘い匂ひのひや／＼とした露が、毛孔へ沁み入る皮膚のよろこびは、格別であつた。紅やとの、こを塗るに随つて、石膏の如く唯徒らに真つ白であつた私の顔が、潑刺とした生色ある女の相に變つて行く面白さ。

愉悦をとめないながら△私Vの顔は生氣に満ちた女の相貌へと變化していく。明らかに△私Vは變換しつゝあるのだ。そもそも化粧とは存在の反転を可能ならしめるものだろう。たとえば、古来、人びとは神や異形の者への変身願望を化粧によって果たそうとしてきた。日本のみならず、多民族間に同様のことが共通して見られることはJ・フレイザーの『金枝篇』の説くところである。人は化粧行為によって日常の負荷的な存在からの脱出を企てたのだ。つまり、化粧とは可視的な日常の自己を溶解し、不可視の、それについて根源的な自己を召還しようという、いわば通過儀禮的装置なのである。因みに、下川耿史氏は「女装私論」⁽⁶⁾の中で女装を△死の儀式Vと捉え、人は女装することによって生から死へ、更に死から生へと再生する過程を辿ろうとしている、と指摘している。また、最近の精神医学界では、化粧に内在する自己表現性、非日常性に注目し、患者の治療に役立てようとする△化粧療法Vの研究が行われている、⁽⁷⁾という。

さて、△私Vの化粧∥女装の試みは皮膚感覚によって内面化される。△私の肉体は、凡べて普通の女の皮膚が味はふと同等の触感を与へられV、緊め付けている丸帯と扱帯の具合で△私の体の血管には、

自然と女のやうな血が流れ始め、男らしい気分や姿勢はだん／＼となくなつて行くVのである。しかし、真の意味で、反転した自己存在がリアリティーを保證されるためには、自分に感知されているその自己存在が、他者の眼差しに映る自己像と同値でなければならぬ。言い方を換えれば、他者の目に映じた自己像を外部から眺めつつ、返送されたその像を自己存在として認知する手続きが必要なのである。

△私Vの認知は次のように行われる。

十二階の前から、池の汀^{みぎは}について、オペラ館の四つ角へ出ると、イルミネーションとアーク燈の光が厚化粧をした顔にきら／＼と照つて、着物の色合や縞目が、はつきりと読める。常盤座の前へ来た時、突き当りの写真屋の玄関の大鏡へ、ぞろ／＼雑沓する群衆の中に交つて、立派に女と化け終せた私の姿が映つて居た。こつてり塗り付けたお白粉の下に、「男」と云ふ秘密が悉く隠されて、眼つきも口つきも女のやうに動き、女のやうに笑はうとする。甘いへんなうの匂ひと、囁くやうな衣摺^{きぶす}れの音を立てつゝ、私の前後を擦れ違ふ幾人の女の群も、皆私を同類と認めて訝^{あや}まない。さうして其の女達の中には、私の優雅な顔の作りと、古風な衣装の好みとを、羨ましさうに見てゐる者もある。

写真屋の大鏡には群衆の中の自己像が映し出され、返送されたその鏡像は△私Vに変換の完璧性を確認させる。また、傍をすれ違ふ幾人かの女性の視線も△私Vの変身に微塵の疑いも見せない。化粧∥女装

の仕掛けによって日常の負荷は廃棄され、 \wedge もう一度幼年時代の隠れん坊のやうな気持を経験して見た \vee いという所期の願望は、やっと満たされたといえよう。前引の部分に続く箇所、 \wedge いつも見馴れて居る公園の夜の騒擾も、「秘密」を持つて居る私の眼には、凡べてが新しく、奇妙であつた \vee 、と \wedge 私 \vee はいうが、それは自己変換を前提としたことではじめて日常の平面が迷宮と相似な未知の異相を見せ始めたことを意味しているのである。作品のはじめの部分に還つて言えば、現実を遮断して仮構された \wedge 隠れ家 \vee 異空間が、ようやくその四壁を開き、外部への侵蝕を開始したのである。

三

女 \bullet の \wedge 私 \vee は、 \wedge 夢のやうな不思議な色彩 \vee を見せる未知の街を毎晩のように徘徊する。自己変換に充足する \wedge 私 \vee は、もはや他者の眼差しに怯えはしない。むしろ逆に、変換した自身の眼に新鮮な光景を灼き付けようと、積極的に \wedge 宮戸座の立ち見や活動写真の見物の間 \vee に身を投じる。しかし、事は意図どおりには運ばない。一週間ほど経過したある晩、いつもより多量にウイスキーを飲んで \wedge 三友館 \vee に出かけた \wedge 私 \vee は、そこで思いがけず運命の女に出逢うのである。

女は二十二三と見えるが、其の実六七にもなるであらう。髪を三つ輪に結つて、総身をお召の空色のマントに包み、くつきりと水のしたゝるやうな鮮やかな美貌ばかりを、此れ見よがしに露はに

して居る。芸者とも令嬢とも判断のつき兼ねる所はあるが、連れの紳士の態度から推して、堅儀の細君ではないらしい。

「……… Arrested at last. ……」

と、女は小声で、フィルムの上に現れた説明書を読み上げて、土耳古巻の M.C.C. の薫りの高い烟を私の顔に吹き付けながら、指に箆めて居る寶石よりも鋭く輝く大きい瞳を、闇の中できらりと私の方へ注いだ。

あてやかな姿に似合はぬ、太棹たざおの師匠のやうな皺喰れた声、——其の声は紛れもない、私が二三年前に上海シヤンハイへ旅行する航海の途中、ふとした事から汽船の中で暫く関係を結んで居た T 女であつた。

T 女と \wedge 私 \vee は、本名も名乗り合わず、住所も境遇も知らぬままに別れた。いや、上海に着くと同時に、 \wedge 私は自分に恋ひ憧れてゐる女を好い加減に欺き、こっそり跡をくらまして了つた \vee のである。上陸によって女の世俗性が露呈するのを \wedge 私 \vee は忌避したのであり、比喩的言い方をすれば、みずからの想像力によって \wedge 太平洋上の夢の中なる女 \vee を生かし続けるために陸の女からの逃亡を企てたのである。とすれば、 \wedge 私 \vee の \wedge 隠れ家 \vee への隠遁は既に二年前の T 女からの \wedge 隠れん坊 \vee に端を発していた、と考えて差し支えなからう。

二年に及ぶ \wedge 隠れん坊 \vee は、しかし、 \wedge 水のしたゝるやうな鮮やかな \vee T 女の出現によって終わりを告げることになる。T 女が小声で呟くように、 \wedge 私 \vee の運命は \wedge Arrested at last. \vee に逢着することが既に予知されていたのである。また、女のインシヤル \wedge T \vee も実に暗示的

であるといえよう。△T△Vはアルファベット二十六文字の中から偶然に選ばれたものではない。単に女の匿名性||非現実性のみならず、△隠れん坊△Vに於ける役割をも象徴しているように思われるのである。結論を言えば、それは鬼ごっここの鬼、すなわち tagger の△T△Vではないか。隠れ潜んでいる男を二年がかりで鬼||T女がやっと探し当てたのだ。

T女の出現によって、△私△Vの女装||化粧は次のように脱色する。

実際其の女の隣りに居ると、私は今迄得意であつた自分の扮装を卑しまない訳には行かなかつた。表情の自由な、如何にも生き／＼とした妖女の魅力に気圧けおされて、技巧を尽した化粧も着付けも、醜く浅ましい化物のやうな気がした。女らしいと云ふ点からも、美しい器量からも、私は到底彼女の競争者ではなく、月の前の星のやうに果敢はかなく萎しれて了ふのであつた。

T女の放つ妖艶美の前では、扮装した△私△Vの姿は卑俗で醜悪なものでしかなかつた。どれほど巧妙に扮装を凝らしても、所詮それは空虚な△技巧△Vにしかすぎない。T女の所作や表情に△男の心を誘惑する甘味△Vを感じる△私△Vは、完全な変換を遂げたはずの自己の内部に、依然として消去されないでいる男の性の伏在を知らされたのだ。明らかに自己変換の破綻である。

△技巧△Vの偽瞞性が暴かれたとき、△私△Vは敗北を認め、T女の△美貌に対して、嫉妬と憤怒を感じ△Vる。しかし、△私△Vはそこに停滞しているわけではない。悔恨のかわりに、こんなことを考えるので

ある。——△今一度男として彼女を征服して勝ち誇つてやりたい。かう思ふと、抑へ難い欲望に駆られてしなやかな女の体を、いきなりむづと鷲掴みにして、揺す振つて見たくもなつた△Vと。つまり△私△Vは、T女の美しさに打ち崩された自己変換を、△男として△V△T女を△征服△Vすることによって補償しようとするのである。これは明らかに、G・バタイユのいうエロティシズムへの傾斜である。すなわち、△私△Vは△相手の存在への侵犯(8)||女との一体化を図ることによって、エロティックな欲望状態の中で、露呈した自己の醜悪な日常性を再度解体しようとすることを意味しているのだ。比喩的に言えば、今度は△私△Vが△隠れん坊△Vの鬼になるのである。見つけられた者が次に鬼になるのは△隠れん坊△Vの自明のルールである。

△私△Vは内密に会いたい旨をメモにしたため、女の袂にしのばせる。女も手紙で応諾する。手紙には△Mr. S. K. V. という宛名の後に、△君の御住所を秘し給ふと同様に、妾も今の在り家を御知らせ致さぬ所存にて、車上の君に眼隠しをしてお連れ申すやう取りはからはせ候△Vと書かれてあつた。密会が互いの住所を明かさぬことを前提とするのは、密会を△朦朧とした、現実とも幻覚とも区別の付かない△エロティシズムの極致にまで成熟させるためである。もちろん、呼び名も△T△Vと△S. K. V. 日常に関わる全ての具体性は放棄されるのだ。しかし、それにしても、△Mr. S. K. V. とは、前記の△T△V同様に、実に象徴的なイニシャルであると思われる。△隠れん坊△Vのことを英語で hid-and-seek というが、T女に掴まえられた時点で△私△Vは hid から seek に移行したのである。つまり、△S. K. V. とは seek を表しているのだ。事実、△私△Vは女の△隠れ家△Vを探し求めて奔走すること

になる。

さて、△私▽は翌日、約束の待ち合わせ場所、浅草の△雷門▽に掛けていく。

明るく日の晩は素晴らしい大雨であつた。私はすっかり服装を改めて、対の大島の上にゴム引きの外套を纏ひ、ざぶん、ざぶん、と甲斐絹張りの洋傘に、滝の如くたゞきつける雨の中を戸外へ出た。新堀の溝が往来一円に溢れてゐるので、私は足袋を懐へ入れたが、びしょ／＼に濡れた素足が家並みのランプに照らされて、びか／＼光つて居た。夥しい雨量が、天からざあ／＼と直瀉する喧囂の響の中に、何も彼も打ち消されて、ふだん賑やかな広小路の通りも大概雨戸を締め切り、二三人の警端折りの男が、敗走した兵士のやうに駆け出して行く。電車が時々レールの上に溜まつた水をほとぼらして通る外は、ところ／＼の電柱や広告のあたりが、朦朧たる雨の空中をぼんやり照らしてゐるばかりであつた。

約束の場所に通じる街の広小路は、滝のような大雨に洗われている。普段は日常的活況を呈している通りも雨戸を閉ざし、激烈な雨音が響くばかりである。二三人の男たちも、わが家を目指して一散に逃げていくかに見える。電車も町の塵埃を洗い流すかのように△水をほとぼらせ△ながら走るばかりで、乗っているはずの客の気配すら感じられない。街は激しい雨に△何も彼も打ち消されて▽、朦々とした空間と化している。既に、目的地への通路自体が現実の生活圏とはか

け離れた、先の△隠れ家▽と等価な△Obscureな▽場所に転位しているといつて差し支えないだろう。

しかし、大雨はそうした空間転位の装置としてのみ作用してゐるのではない。雨∥水そのものがT女の本質的な存在意味を象徴していることに注目する必要がある。いくつかの具体例を示すと、T女は次のような水のイメージをそなえている。——△くつきりと水のしたゝるやうな鮮やかな美貌▽、△太平洋上の夢の中なる女▽、△睫毛の長い潤味を持った円い眼▽、△しなやかな手をちら／＼と、魚のやうに泳がせてゐるあでやかさ▽、△海の上で知り合ひになつた夢のやうな女▽、△人魚のやうに体を崩して擦り寄りつゝ……▽など——。これら類出する水と女の符合は、明らかにT女が水の女であることを物語っている。水の女とは母なるものの象徴ではないか。既に、G・バシュラールやM・エリアーデが幾多の証拠を掲げて言及しているごとく、△水は芽を膨らませ泉を溢れさせる。水は、いたるところに生れそして嵩が増えるのが見える物質である。泉は抑えきれない誕生、持続する、誕生である。これらの非常に大きいイメージはそれらを愛する無意識的なるものをつねに指示している⁽⁹⁾。したがって、水との一体化を夢見ること、それは△治療としての過去回帰▽願望、あるいは母胎への限らない憧憬を意味する、といえる。因みに、谷崎潤一郎は、しばしば自作に水の女を登場させ、主人公の切実なる思慕を描いている。たとえば、「人魚の嘆き」(『中央公論』大6・1)などが最も典型的なものといえるだろう。あるいはまた、「母を恋ふる記」(『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』大8・1〜2)に描かれた夢幻の水景などを見ても、谷崎にとって、水のイメージが懐かしい母を喚起させるもので

あつたことが分かるだろう。

「秘密」に戻ろう。夢の女が△私▽の深層に潜在する懐かしい水の女であるなら、女との密会は水を浴びることを前提としなければならぬ。前引のごとく、T女との待ち合わせの時間に大雨が降り、しかもそれを△素晴らしい▽と感じるのは、所与の前提をくぐり抜けることよって、限りなく水の女に接近できる、という予感があるからではないか。事実、△私▽は雨に打たれながら△びしょ／＼に濡れた素足▽で、△外套から、手首から、肘の辺まで水だらけになつて▽、待ち合わせ場所に辿り着く。密会の起点△雷門▽——そこは風神・雷神が支配する、水界への開口部である。

四

△私▽は雨の△雷門▽で夢幻の女を待っている。やがて暗闇の中から△赤い提灯の火▽が浮かび上がる。約束どおり、T女が俥で迎えに来たのだ。

「旦那、お乗んなすつて下さい。」
深い饅頭笠に△雨合羽を着た車夫の音が、車軸を流す雨の響の中に消えたかと思ふと、男はいきなり私の後へ廻つて、羽二重の布を素早く私の両眼の上へ二た廻り程巻きつけて、蟬谷の皮がよぢれる程強く緊め上げた。

車夫が△羽二重の布▽で△私▽に眼隠しをするのは、もちろんT女

の△今の在り家を御知らせ致さぬ▽約束によるのだが、夢幻の女との一体化を希求する△私▽にとつても、それは通過儀礼ともいふべき不可欠の手續きであると思われる。眼隠しが△蟬谷の皮がよぢれる程強く緊め上げ▽られるのも、通過儀礼にともなう必然的な痛みとして理解できよう。△私▽に眼隠しが不可欠なのは、視覚の喪失によってこそ見えてくるものがあるからに他ならない。たしかに、眼は対象を最も確に領有する。しかしそれは、現象面に限ったことであつて、合理化不能の世界に対しては眼はほとんど無力である。むしろ逆に、たとえば夢の世界に参入するには入眠が必要であるように、健全な視覚の喪失を前提としてはじめて、深層の闇から不可視の明が浮上してくる、という仕組みがある。△夢の中の女▽との同化を庶幾する△私▽がおのれの視力を放棄しなければならぬ所以は、そうした仕組みに存在するのである。そういえば、谷崎は後年の「春琴抄」(『中央公論』昭8・6)で、夢幻の春琴を心に灼きつけるために佐助の眼を奪い、△眼が潰れると眼あきの時に見えなかつたいろ／＼のものが見えてくるお師匠様のお顔などもその美しさが沁々と見えてきたのは目しひになつてからである▽と語らせている。

さて、眼隠しされた△私▽は車夫に促されて俥に乗り込む。

しめつばい匂ひのする幌の上へ、ばら／＼と雨の注ぐ音がする。疑ひもなく私の隣りには女が一人乗つて居る。お白粉の薫りと暖かい体温が、幌の中へ蒸すやうに罩つてゐた。
轆を上げた俥は、方向を晦ます為めに一つ所をくる／＼と二三度廻つて走り出したが、右へ曲り、左りへ折れ、どうかすると

Labyrinth の中をうろついて居るやうであつた。

△ラビリンスは人間の動線の軌跡によって実現されるのである。しかもその動線は曲がりくねり、旋回している。▽とは、海野弘氏の言葉だが、△私▽も視覚の喪失と回転にともなう座標軸の混乱によって△Labyrinth の中をうろついて居るやうな感覚に陥る。しかし、より肝要なのは、その迷宮感覚が同時に、△しめつぽい匂ひのする幌▽の中の、蒸すような△お白粉の薫りと暖かい体温▽の感触をともなっている、ということである。誤解を恐れずに言えば、△しめつぽい匂ひ▽に包まれた△幌▽（母衣）とは、羊水を内蔵した子宮のメタファーであり、その△幌▽の中でエロティックな感触に包まれている△私▽は、前記のバタイユのいう——△存在の最も深部に意識を失うまで到達せんとする▽——甘美な胎児感覚に浸っている、と考えられる。因みに、小松和彦氏は、△かぶりもの▽など、中がうつつなものについて、△何者かが宿る時空なのである。それは一種の「母胎」であり、この世と他界との媒介項であり、通路である▽と、象徴論的な分析をしている。

△私▽はもちろん、そうした感覚の内実を、この時点で意識化しているわけではない。夜の街、激しい降雨、眼隠し、しめつぽい幌、女の匂いと体温——それらが醸し出す朦朧とした雰囲気に含まれながら女の△隠れ家▽へと誘引されていくばかりである。一時間ほど経って、女の住み処に辿り着いた△私▽は、眼隠しをはずされ、視力を回復する。しかしそこは、東京のどのあたりに相当するのか、また住まいの様子も△待合とも、妾宅とも、上流の堅気な住まひとも見極めがつか

ない▽、文字どおりの迷宮空間であつた。

対面した女は、△夢のやうな女だと思つて、いつまでも付き合いたすつて下さい▽と、しとやかな素振りで見せ始めるのだ。そのとき、△私▽の内心は明らかな変化を見せ始めるのだ。

女の語る一言一句が、遠い国の歌のしらべのやうに、哀韻を含んで私の胸に響いた。昨夜のやうな派手な勝気な伶俐な女が、どうしてかう云ふ憂鬱な、殊勝な姿を見せることが出来るのであらう。さながら万事を打ち捨て、私の前に魂を投げ出してゐるやうであつた。

女の言葉は、△私▽の心に、△遠い国の歌のしらべのやうな哀韻を喚起させる。事情はもはや明らかだろう。迷宮に住む△夢のやうな女▽に対面したとき、△私▽はその女の中に、不可視の、それでいて懐かしい幻影——母なるものの気配を感じ取ったのだ。△遠い国の歌のしらべのやう▽とは、長い時間の遡及の果てから聞こえてくる子守唄の響きであろう。別言すれば、幾多の秘儀を通過した△私▽の深層から、あらゆる虚飾を取り去った、不可視の△魂▽が浮上してきたのである。日常の生活圏で生ききれなかった△私▽が、傷ついた神経を癒し、根源的なアイデンティティを回復するのは、既に間近に迫っている、といってよいだろう。後は、△夢のやうな女▽の住む迷宮空間の位置を確認するだけである。

ある晩、△私▽は女にせがんで一瞬の間だけ眼隠しを解いてもらう。そのとき△私▽の眼に映ったのは次のような光景である。

美しく晴れ渡つた空の地色は、妙に黒ずんで星が一面にきら／＼と輝き、白い霞のやうな天の川が果てから果てへ流れてゐる。狭い道路の両側には軒を並べて、燈火の光が賑やかに町を照らしてゐた。

不思議な事には、可なり繁華な通りであるらしいのに、私は其れが何処の街であるか、さつぱり見当が付かなかつた。俵はどん／＼其の通りを走つて、やがて一二町先の突き当りの正面に、精美堂と大きく書いた印形屋の看板が見え出した。

晴眼が捉えた街の様子は、前に掲げた最初の晩の△素晴らしい大雨△の光景とは見事なほど対照的である。△美しく晴れ渡つた空△には星が輝き、道の両側には△賑やかに△店が軒を並べている。以前の風景が非日常的な気配に包まれていとすれば、これは明らかに日常の光景であろう。それは△私△の眼に映じた△精美堂と大きく書いた印形屋の看板△が象徴している。小森陽一氏が△印形屋の看板△に觸れて、△実態のない個人の自己同一性を、資本主義的な契約を成立させるために、法的に保証する記号である△と⁴⁴言及するように、それは日常生活圏に於ける自己証明の典型なのである。

迷宮空間^{ラビリンス}の所在地を確認しようという最後の試みは、結果的に迷宮から遠ざかる方向に△私△を運んで行く。それは△私△が肝心なところで視力の回復に執着したからに他ならない。なぜなら、視覚に対する信頼は、同時に、不可視の闇の世界を引き寄せる始原的な感覚に対する裏切りを意味するからである。むしろ、△私△はそのことに何も気づいてはいない。

△或る朝△、△私△は記憶を頼りに迷宮の所在地確認を敢行する。雷門から千束町↓竜泉寺町↓車坂下↓お徒町へと進み、やつとそこで、△頭にはツきりと印象されて居た△印形屋の看板△を発見する。しかし、△其処は毎晩夜店が出る下谷竹町の往来の続きであつた△。しかも、以前、扮装用の着物を買つた△古着屋の店△も近くに見える。未知の迷宮空間^{ラビリンス}を探し求める△私△は、にもかかわらず、眼の記憶によって既知の場所へと導かれたのである。△私△の眼に映る、△秋の日にかん／＼照り付けられて乾涸^{ひから}びている貧相な家並△は、深層に潜む、懐かしい水界とは全く正反対の醜悪な生活の場ではなかつたのである。

丁度道了権現^{だうれちこんげん}の向ひ側の、ぎつしり並んだ家と家との^{ひまはひ}底間を分けて、殆ど眼につかないやうな、細い、さゝやかな小路のあるのを見つけた時、私は直覺的に女の家が其の奥に潜んで居ることを知つた。中へ這入つて行くと右側の二三軒目の、見事な洗ひ出しの板塀に囲まれた二階の欄干から、松の葉越しに女は死人のやうな顔をして、じつと此方を見おろして居た。

△私△はようやく△夢のやうな女△の住み処に到達した。しかしながら、既に△印形屋の看板△を発見したときに予感されていたとはいへ、そこは△私△に慰撫と再生とを保証する△遠い海の向うの、幻の国△などではなく、生まれて此方△二十年来△生活してきた△人形町△の一部にすぎなかつたのである。女も、もはや懐かしい水のイメージとは程遠く、△死人のやうな顔△を晒している。夢幻の女の脱

色性、それはそのまま△私▽の精神的な停滞を意味する。すなわち、退行の果てに浮上するはずの母なるものが、現実の△芳野と云ふ其の界限での物持の後家▽にしかすぎないことを痛覚したとき、傷ついた△私▽の精神を治癒し再生させる道は閉ざされてしまったのである。△私は其れきり其の女を捨てた▽。——女の正体を見つけたとき、△私▽の△隠れん坊▽は終わったのである。

五

谷崎潤一郎は、△私▽の夢の挫折を語ったあと、次の一節で作品を閉じている。

二三日過ぎてから、急に私は寺を引き払つて田端の方へ移転した。私の心はだん／＼「秘密」など云ふ手ぬるい淡い快感に満足しなくなつて、もつと色彩の濃い、血だらけな歓楽を求めめるやうに傾いて行つた。

△私▽は再び、△面白くもない懶惰らんたな生活▽に戻つていくわけではない。夢と現実との落差に痛覚した△私▽は、それだからこそかえつて、より一層発酵した濃密な異様の世界を追い求めようというのである。別言すれば、△夢の中の女▽が卑俗な日常の女にしかすぎなかつたという悔恨は、夢幻世界の脆さを認識することに続いていくのではなく、いわば創出手段＝想像力の未熟さを自覚する方向に作用しているのである。G・パシュラールの言葉を借りれば、△非現実機能の微

妙な効果のおかげで、想像力により、わたしたちは信頼の世界に、信頼する存在の世界に、夢想の本来の世界に戻つてい▽ける06ことを、△私▽はまだ確信している、といつてよいだろう。

問題は想像力の濃度であろう。数日の思案期間を置いて、△私▽が△松葉町▽から△田端▽に移動するのも、そのことと緊密に関わっている。△田端▽——当時の東京府下豊島郡滝野川町字田端は、文字どおり一面に畑の広がる田舎町である。何の変哲もない田舎町に刺激的な愉楽などあろうはずがない。にもかかわらず、△私▽はそこで、△もつと色彩の濃い、血だらけな歓楽▽を追い求めようというのである。おそらくそれは、△田端▽という場所自体が平板で、何の変化もない生活圏であるがゆえに、かえつて想像力の増幅が強いられるからではないか。△私▽の夢幻の世界が日常の卑俗な女の前であえなく崩壊したのは、△松葉町▽という親和的な界域に△私▽は身を置いていたからではないだろうか。つまり、△私▽には、日常と非日常という対立的構図が用意されていなかったのである。△私▽ははじめから、△ひそかに▽日常の生活圏から隠退し、甘美な空間の中でおのれの想像力を発酵させていたからこそ、醜悪な日常性に対しては、何の防御力も持ち得なかつたのである。既に明らかであろう。△私▽の△田端▽への移転は、能動的に日常の側に接近することによって、あるいは日常と想像力という対立構造を取ることによって、より一層想像力を増殖させようという企てに他ならないのである。

因みに、谷崎潤一郎は「秘密」に続いて、明治四十五年の『中央公論』二月号に「悪魔」を発表している。谷崎自身が△此の作に於てやや写実的な試みをしたつもりである▽という作品だが、この「悪魔」

に描かれている佐伯の△奇妙な楽園▽の創出こそ、「秘密」最終部に於ける△私▽の企てがもたらした産物なのではないだろうか――。

(了)

付記

谷崎潤一郎の文章は全て没後版『谷崎潤一郎全集』（中央公論社）より引用したが、漢字は原則として新字体に改めた。

注

- (1) 「青春物語」△「新思潮」創刊前後のこと▽（『中央公論』 昭7・9、昭8・3）
- (2) 注(1)に同じ。
- (3) 「明治大正文学全集谷崎潤一郎篇解説」（『明治大正文学全集』第三十五卷 昭3・2 春陽堂）
- (4) 谷崎精二「谷崎潤一郎氏に呈する書」（『早稲田文学』 大2・4）注(1)に同じ。
- (5) 下川耿史「女装私論」（『セクソロジー異聞』 1992・11 青土社）
- (6) 小西聖子「黄色いアイシャドウ化粧についての精神医学的私見」（『Imago』第二巻第四号 1991・4 青土社）参照。
- (7) G・バタイユ『エロティシズム』（澁澤龍彦訳、1973・4 二見書房）
- (8) G・バンシュール『水と夢―物質の想像力についての試論』（小浜俊郎・桜木泰行訳、1969・8 国文社）
- (9) M・エリアーデ『神話と夢想と秘儀』（岡三郎訳、1982・3 国文社）
- (10) 海野弘「螺旋と迷宮」（岡本太郎編『迷宮幻想』 1980・12 日本ブリタニカ）
- (11) 注(8)に同じ。
- (12) 小松和彦「異界創出装置としての『かぶりもの』」（『自然と文化』夏季号

昭60・6 日本ナショナルトラスト）

- (14) 小森陽一「都市の中の身体／身体の中の都市」（佐藤泰正編『文学における都市』 昭63・1 笠間書院）

(15) 当時の地図には△人形町▽という町名は見当たらないが、現在は中央区の北東部にその町名がある。女の住まいは△道了権現▽の近くだが、そこは当時の日本橋区蛸殻町二丁目に当たり、現在の△人形町▽に包括される。おそらく、当時蛸殻町二丁目は通称△人形町▽と呼ばれていたと推測される。因みに、谷崎潤一郎も蛸殻町二丁目（一四番地）の生まれである。

- (16) G・バンシュール『夢想の詩学』（及川馥訳、1976・6 思潮社）
- (17) 注(3)に同じ。